

旅する工具屋



第十話：ドイツに住むこと、肉屋と話す喜び。

10回目の連載となる今回は「旅先」ではなく住んでいたドイツです。もちろん、ほかの国に比べて非常に多くの思い出があるため2ページではとても書き切れません。そのためベルリンやノイシュヴァンシュタイン城といったベタな観光地の事はほかの旅行記にお任せして、ここでは(つまらないかもしれませんが、)駐在員として暮ら始めた頃の思い出を主に取り上げたいと思います。

私が住んでいたのはドイツの北西に位置する、ライン川が通る日本人の多い街でした。日本の食料品も簡単に手に入り、ホテルも快適だったため、着いた直後は海外に住んでいる自覚を持ってませんでした。しかし自分で家を探し、車を運転し、仕事をしながら生活を組み立て始めた途端2つの大きな壁にぶつかる事になります。

1つ目の壁は休まらない家に住むことでした。日本で8畳のアパートに住んでいた私は、その3倍以上ある床面積に落ち着かず、4倍の口数となったコンロ(しかも電熱式)を持って余し、なぜか4分の1未満になったバスルームにやり切れない思いをしながら生活をスタートしました。「この休まらない家で暮らしていけるのか？」と不安に思うことは数知れず、何とかしなくてはという妙な焦燥感に煽られていたのです。

この問題はあっけなく解決されました、簡単に予想できることかもしれませんが「慣れ」です。段ボール箱が開き、荷物が棚に入り、炊飯器が

巨大な変圧器に繋がれ、自分に合うシャンプーと出会った頃、その日がやってきました。長めの出張から帰ったある日、ドアを閉めた瞬間に「ほっ」とする感覚を覚えたのです。噛みしめる様に安堵感を堪能して「そうか、ここが自分の家になったんだ」と嬉しく思いました。



2つ目の壁はドイツという国の文化や国民性、いわゆるカルチャーショックです。人と話すときよく「ドイツ人と日本人って近いでしょ？」と聞かれます。おそらく観光する程度ならそう思うかもしれませんが、住んで仕事をするとすると話は別です。確かに近い一面もありますが、(EUで仕事をする上では)日本人に一番近い、という強い条件が前に隠されていると個人的には感じました。徹底的な分業化、合理化、規格化に秀でているのでエモーショナルなラテンの国々よりも随分仕事が捗ります。しかし一方でその精密機械のような精神が「融通の利かなさ」に変わることもあり、意見が合わない場合には(本当に)大変な思いをすることもありました。

仕事が終わってレストランに行くと、自分のテーブル担当以外は注文も勘定も無視。家電屋ではTVコーナーのスタッフに、すぐ横のPC備品の在庫を尋ねると「知らない」の一言で撥ね返られます。すぐ横で困っている人やお願い事を抱えた人がいるのに、なぜ無視できるの？と訳が分からないまま奇立ち半分、悲しさ半分で立ちすくむこともありました。

スーパーも遅くまで開店しておらず、日曜は閉店。土曜も閉店時間が早いためうっかり食べ物を切らすと次に手に入るのは2日後。24時間営業のコンビニなんて勿論無いので自分の生活をきちんと管理しなければ痛い目に遭います。

これは出張やイレギュラーな帰宅時間が続く私にとって、最も鍛えられた点かもしれません。しかし1週間から2週間先までを見渡し、仕事の量や買い物の量を計算して過不足無い生活を送るように心掛けると次第にドイツの物やその仕組みが馴染んでゆきました。そしてまた思考のメカニズムも、微かにではありますが見えてくるようになりました。

1つ目の壁はある日霧のように、2つ目の壁はいつの間にか柔らかくなり、身体に纏うように姿を消しました。無論、細かい違和感や未だに理解できない点がゼロになることはありませんが、遠い異国の地で枯れること無く芽吹くことができたのは本当に幸運だったと思います。

その後、徐々にドイツへ根を張ることになりますが、微妙なストレスや気持ちのグラつきをいわば「校正」してくれた一人の男性への感謝をせずにこのエッセイを終わることはできません。その人は普通のスーパーの精肉カウンター担当でしたが、不思議と打ち解けて言葉を交す仲になったのでした。

毎週彼がいる精肉カウンターを訪れると挨拶と簡単な雑談の後、ステーキ肉の真剣な話合いを行いました。この前のカットは厚すぎたとか、脂の最適な割合はどうだとか、器の温度に至るまで何故か彼は苦手な英語で、私は壊滅的なドイツ語で互いに話すのでした。



ステーキという、仕事でもドイツのことでもない中立な話をする相手がいたお陰で私は自身の気持ちを週に一回洗濯することができました。傍から見れば「そんなことで？」と思われるかもしれませんが、「そんなこと」こそが大切だったのでした。

人それぞれに、色々な相性や置かれた境遇があるので「こうすれば駐在生活は大丈夫」などと大それたことは言えません。しかし自分の体験を振り返ると、固定概念や先入観をいかに忘れられるか、あるいは忘れたふりをできるかで、随分と物事の見え方が変わったように思います。

日本に帰った今、パック品が並ぶ静かな精肉コーナーに足を運ぶと寂しい気持ちになることがあります。紙袋に入った切りたてのステーキ肉を持って、いそいそと家路を急ぐあの優しく暖かい感覚を無意識に求めているのでしょうか。「特別に真ん中の旨い所から切ってやるよ！」なんて言葉がまた聞いたら嬉しいものです。

文：ペンネーム 17chandler